

氏名(本籍)	はし 橋	もと 本	たか 貴	あき 朗	(埼玉県)
学位の種類	博士(芸術学)				
学位記番号	博甲第5136号				
学位授与年月日	平成21年3月25日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審査研究科	人間総合科学研究科				
学位論文題目	「慈光寺経」研究				
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋正彦		
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	中村伸夫		
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	森岡隆		
副査	筑波大学名誉教授		角井博		

論文の内容の要旨

(目的)

「長谷寺経」などの鎌倉時代の装飾経は、日本美術史や日本書道史で優品として高く評価されながらも、「平家納経」「久能寺経」等の平安時代後期の遺例に比べて論究が少なく、研究の進展が待たれるところである。本論文は、これら鎌倉期の装飾経の実相解明を視野に据えつつ、まず「慈光寺経」33巻に焦点を絞り、その伝来過程や補写・修復などについて検証するとともに、日本書道史の立場から各巻の書風を考察することにより、成立事情や制作年代に新知見を提示することを目的としている。

(対象と方法)

まず、江戸時代後期以降の「慈光寺経」研究史を総括し、本論文における課題を明示。慈光寺(埼玉県比企郡ときがわ町所在)の歴史を概観する中で同寺への納経時期を探った後、以後の伝来過程と江戸時代における補写・修復について、その経緯と実態を考察した。次いで、所用料紙や見返しなどの装飾の特徴から、装飾経史上における位置づけを検証した。また、各巻の書風および同経に附属する「一品経書写次第」の検討を進めたうえで、同経の制作年代を再検討し、段階的編纂説の補強を意図したものである。以下のとおり、5章から成る構成で考察がなされた。

- 第1章 「慈光寺経」の研究史とその課題
- 第2章 慈光寺の歴史と納経時期
- 第3章 伝来過程と江戸時代における補写・修復事業
- 第4章 料紙装飾と装飾経史上における位置づけ
- 第5章 書風分類と制作年代の再検討

(結果と考察)

第1章では、天明6年(1786)の奈佐勝臯『山吹日記』以降の「慈光寺経」の研究史について、時代区分と画期を成す研究によって5期に分けてたどるとともに、各々の論点を整理、考察し、本論文での課題を明らかにした。

第2章では、慈光寺の文献上の初見を平安時代中期の長久年間(1040～44)の『大日本国法華経験記』に求め、以後の寺史を概観。慈光寺に同経の所在が確認できる資料は明和8年(1771)刊の亮盛『坂東三十三所観音霊場記』まで下るものの、文明年間(1469～1487)の兵火で法華経經典数巻が焼失したと記す寛政3年(1791)の史料(慈空「書写功德略縁起」)等と、寛政2年の「一品経補書之次第」に見る6巻補写の記録(現存5巻)との検証により、文明年間までに納経されていた蓋然性が高いことを指摘した。

第3章では、田安宗武正室の森姫(近衛家出身)の追善供養として、没年の天明6年(1786)から寛政2年にかけて、田安・近衛両家および田安家の菩提寺である寛永寺等の連携のもとに補写・修復が行われたことを指摘した。あわせて、天保6年(1835)に義仙が著した縁起『慈光寺実録』所収の修復記事が、同じく慈光寺蔵の「安倍小水磨願経」についてのものであることも指摘した。

第4章では、見返しを含め、各巻の料紙装飾の面から検討した。本紙天地の波文様が伝光厳天皇筆「前・後十五番歌合」と近似する「法師功德品」のように、1260年ころに下る巻もあると推定し、第1章で3期に位置づけられた田中豊蔵提示の段階的編纂説(『国華』353号所収「慈光寺の法華経に就て」、1919年)の可能性を示唆する。

第5章では、江戸時代の補写5巻と図版不鮮明の3巻を除く25巻の書風を10分類するとともに、「化城喩品」と「法師品」、「勸持品」と「寿量品」を各々同筆と認定。同経に附属する文永7年(1270)の「一品経書写次第」で「勸持品」と「寿量品」に異なる人名が記されていることから、これを結縁者目録と解釈するとともに、多様な書風も含め、鎌倉時代前期から中期(1270年下限)にかけて、段階的に編纂されたと結ぶ。

審査の結果の要旨

一説に「平家納経」「久能寺経」とともに「三大装飾経」とも称される「慈光寺経」だが、前者二経に比べ、同経に関する論考はそう多くはない。鎌倉時代の装飾経の全容解明を視野に据えつつ、地元埼玉県に国宝として伝来する同経の研究を行ったことは、着眼、論考ともに意義あることであつたと言える。

従来、「慈光寺経」は元久3年(1206)に没した九条良経の供養に制作されたと見る説が有力であつた。が、本論文では書風は当然のこととして、日本美術史の成果を援用しつつ料紙装飾も検討することにより、文永7年(1270)を下限とする段階的編纂説を支持する結論を得た。また、滝沢馬琴ほかの『耽奇漫録』(1824～25)所収の考説に基づき、寺伝の修復記事が同経に関わるものでないことを指摘するとともに、江戸時代における補写の時期と実態についても新知見を提示し得たが、これも「一品経補書之次第」に記された6名を子細に考証した成果である。

装飾経といえども經典の一写本であり、今後は本論文の「結」に記されたとおり、經典本文からの検討も期待される場所である。とはいえ、如上の成果はいずれも可能の限りの実見調査も踏まえた実証的なものであり、本論文は、以後の同経研究における起点となる、有為な学位論文と認めることができる。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。